びわこ版

③ 長浜・米川の「かわまちづくり」

再生の息吹

キセキの川 人々と成長

さらさらと流れるせせらぎを、人は「キセキの川」と呼ぶ。

長浜市の中心市街地を縫うように通り抜け、琵琶湖へと注ぐ全長2・5キロの米川は、長い歴史を誇る長浜の町を見守ってきた。

「米川は江戸時代初期の寛永年間から約400年、川の形が変わっていない。つまり河川改修がほとんどなされていない自然な姿がある」

「長浜まちなか地域づくり連合会」の市地域活力プランナー、田中省吾さん(71)が説明してくれた。1950年代半ばまで、川沿いに住む人は米川で食器を洗ったり、果物や野菜を冷やしたりしていた。生活に密着した歴史的な景観が残る。

そんな一級河川も、水質が急激に悪化した時期がある。高度経済成長期の70年代、水質を示す指標の一つ、生物化学的酸素要求量（BOD）は9ppmと、環境基準の類型で最も悪い「E」に落ち込んだ。魚はほとんどすめないことを意味し、川は「どぶ」とまで言われた。

水質改善のための市民活動は、75年に「米川支流を愛する会」が発足してから本格化した。敷地内を米川が流れる環境で育ち、「わしは子どもの時、窓からビワマスをつかんだんや」というのが口癖だった故片野喜代士さんが中心を担った。団体は、名称を変えながら環境美化活動を続けた。

公共下水道の接続が開始されると、水質は一気に回復していった。2005年、BODは水道水に使える水質の「B」相当の3ppmに初めて収まった。今は、さらに改善されて1ppm程度と「A」「AA」を保っている。

それから、米川を中心にした「かわまちづくり」が、連合会と県立大環境科学部の連携で始まった。

多岐にわたる活動の一つに「米川まつり」がある。24年8月、市中心部の曳山博物館近くで開いた際は、川の中にいすやテーブルを置いたカフェを運営。地元の虎姫高校の生徒らがスタッフを務めた。飛び入り参加の子どもたちも数多くいた。

子どもが楽しむ川遊び、学生らによる川掃除や川歩き。背伸びせず、等身大の取り組みが、地域の顔、誇りづくりへとつながっていく。

米川に机やいすを並べて開催したカフェ＝2024年8月、長浜市で

近年、長らく姿が見られなくなっていた琵琶湖固有種・ビワマスの遡上や、稚魚が琵琶湖に下る様子が米川で確認されたというニュースがもたらされた。

上ビワマスの産卵床を作るため、川底を耕す参加者＝2024年10月、長浜市の米川で
下米川で見つかった琵琶湖に向かうビワマスの稚魚＝2024年4月、長浜市で

24年4月、JR長浜駅前で湖に向かう途中の稚魚が見つかり、連合会は目撃情報を呼びかけた。この年の10、11月にも遡上が確認された。川底を耕し、ふかふかの状態にする産卵床作りもした。

「もっともっと市民に目を向けてもらい、関心を高めたい。多くの人が参加することで、より良い『かわまち』の未来を創ることができる」。田中さんはそう強調し、仲間となる「米川フレンド」の会員を募る＝QRコード。

防災面からの新たなアプローチもある。地上に降った雨水を直接、川に流さず一時的にためて、ゆっくりと地中に浸透させる「雨庭」がその一つ。24年に曳山博物館の敷地内に1カ所、試験的に設けられた。今年は、さらに数を増やしていく。

「米川よろず会議」の竹村光雄さん(42)は「24年を『ホップ』とすると、25年は『ステップ』の年にしたい」と語る。

400年を超える歴史と、町の人々とともに、キセキの川は成長し、生きている。

（松本芳孝）